

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します
e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

<北海道熊研究会 会報> 第90号 2019年8月15日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1~89号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

<野幌森林公園に出て来た熊の顛末； 元来た場所に戻った（門崎允昭の見解である）>

公園内に熊が79年振りに現れたが、熊が出て来た原因は、「強烈な爆発音がする銃器での殺戮を中止」した為であり、出て来た目的は、「若熊が行動圏を確立する為に検証に出て来たのである」。若熊(門崎が命名)とは、今年母から自立した満1歳代、ないし満2歳代の個体の呼称である。今回の個体は満2歳4ヶ月令(2月1日を誕生日とする)の若熊である。

戻った原因<公園内での、人との度重なる遭遇を嫌い、元の根拠地に戻った>と言うのが真相である

理由は、熊は人との遭遇を嫌う特性があるから(門崎に見解)

<この熊が出て来た経路>

出て来た経路は、この若熊が、元の根拠地から野幌森林公園に来る間、一度も目撃されていない。しかし、戻った経路は、途中4箇所目撃されている。熊は一度通って安全と見れば、同所を使うから、公園に来た経路も、戻った経路とほぼ同じ箇所を通ったと私は見る。言うならば、主に夜間に、「有明・仁別方面から輪厚方面を経て、西の里の野幌原始林を経て、野幌森林公園に至った」

と私は見る。

この若熊は、6月10日～7月31日の早朝まで、52日間を同公園内とその近傍で過ごし、棲み場と成り得る場所か否か探った結果、この公園地域は、人との遭遇(熊は人との不意の出会いを嫌う特性が強い)が多い事を悟り、それを嫌って、元の住み場に戻ったと言うのが真相である(熊は自分が安心して得た場所に、戻る特性がある)。公園とその付近に居着いて居た52日間の内、6月10日～7月17日迄の38日間はほぼ連日、公園ないし公園付近で、この個体は人に目撃されていたが、7月18日～30日迄の13日間、この個体の目撃情報は皆無となった。私は、目撃されなかった13日間は、この個体は公園内で、人との遭遇を故意に避けながら暮らし、己の生活地とし、得る場所か否かを、真剣に吟味していたと見る。その結果、棲み続ける場所が無い、事を悟り、元の安心して得る場所である島松沢地域に、先ず戻ったと私は見る。行き来した経路だが、断続的に林地はあるが、住宅地・高速道路・商業地域・などもある。このような場所に出て来る個体は若熊に限られる。それ以外の、既に主たる行動圏が確立している個体が、出て来る事は、あり得ない。今後、再び若熊が出て来たとしても、今回の事例から、永住する事は有り得ないから。静観すべきである。

さて、北大名誉教授の金川弘司氏は(北海道新聞2019年8月2日朝刊)に、北広島に出没した熊について「野幌森林公園にやって来たクマが、食料を確保できず元の場所へ戻るために通過した可能性がある」と発言している。検証調査もせず、識者ぶるなど私は言いたい。

(了)